

口絵・早稲田大学図書館新収貴重書(九)

明德記 三卷三冊 慶長十九年古活字版

明德二年(一三九一)に山陰・近畿地方の守護、山名氏が足利將軍義満に対して反乱をおこした。所謂「明德の乱」である。『明德記』はその明德の乱を題材にした軍記物語である。著作の目的は乱の顛末を記録するためとされ、その成立は事件から隔たらない時期で、作者は將軍方にあつた僧侶だろうと考えられている。

近頃館蔵に帰したこの慶長古活字版は、四種の伝本中の第一種、初稿本の形を残しているものに分類される(富倉徳次郎)。刊記を写真掲出したが「于時慶長第十九年無射望日以時」とあるのが特徴であり、版本としては慶長版が『明德記』の最初のものである。この版の完本は伝本が少なく、現在他に内閣文庫等の三本が知られているが、本書は新出の一本である。本館は既に寛永九年整版本を二部所蔵しているが古活字版としては本書が唯一である。蔵書印は伊佐早謙・宝玲文庫が認められるが、惜しむらくは各冊共最終丁の印記のあつたとおぼしき部分が切り取られている。

明德記卷第上

寶曆文庫

去建武年中二大御所尊氏將軍御代ヲ被召テ既六十年
ニ及テ天下悉武德ニ歸シ萬民皆其化誇ル兵亂又絶
テ四海激浪治リ國民無事ニシ九嶋狼烟立去ル歟ニ明德
二年梓歲山名陸奥守氏清同播磨守滿幸以下一類悉
同心メ隱謀ノ企アルニ仍テ不慮ニ兵亂出來テ都鄙暫ク不
穩其盤觴ヲ尋ニ一簇山名官内少輔時熙同右馬頭故
トク間ヘシ譬ヘハ武恩莫太ナルニ驕テ此一家ノ人々每事上
意ヲ奉忽緒體ナリレ中ニ山名伊豫守時義但馬國ニ在感
メ京都ノ跡成敗ニモ不應推忘ニ任テ振舞ナル間誠御沙
汰有ハヤト思食立セ給ケル刻病ヲカサレテ伊豫守早世シ

補其闕雖然不獲其全也庶幾後人就有道而正焉而已

于時慶長第十九年無射望日

以時